文化財をたずねて

No.22

巨石と大岩の伝承をたずねて

発行　赤穂市教育委員会
編集　生涯学習課文化財係
（赤穂市加里屋81　TEL 43-6962）

人の力ではとても動かせないような大きな岩や巨石が市内のあちこちの山間や海岸に見られる。これらは、山上で風化から取り残された岩塊であったり、海岸での風波の不断の侵食などに起因するものであるが、その神秘的なさま、不思議な姿に、人々は畏敬の念をいだき信仰の対象となったもの、また歴史上の人物と結びついたり、あるいは日々の営みのなかの風景として、親しみをもってさまざまな伝説として語り継がれてきたものも多い。もちろん、にわかには信じられないような話もあるが、地域の人々が心のよりどころとして大切にしてきたことを物語る伝承であり、地域の歴史を伝える貴重な遺産である。

①はえぬき地蔵【有年楢原】

有年楢原の中所の山裾にある地蔵で、高さ 1.7m の花崗岩に菩薩像が彫られている。市内に残る中世の石仏としては最も大きく、かつ延文３年（1358）の紀年銘によって建立された年代がわかる貴重なものであることから、「地蔵立像板碑（じぞうりつぞういたひ）」として兵庫県指定文化財となっている。

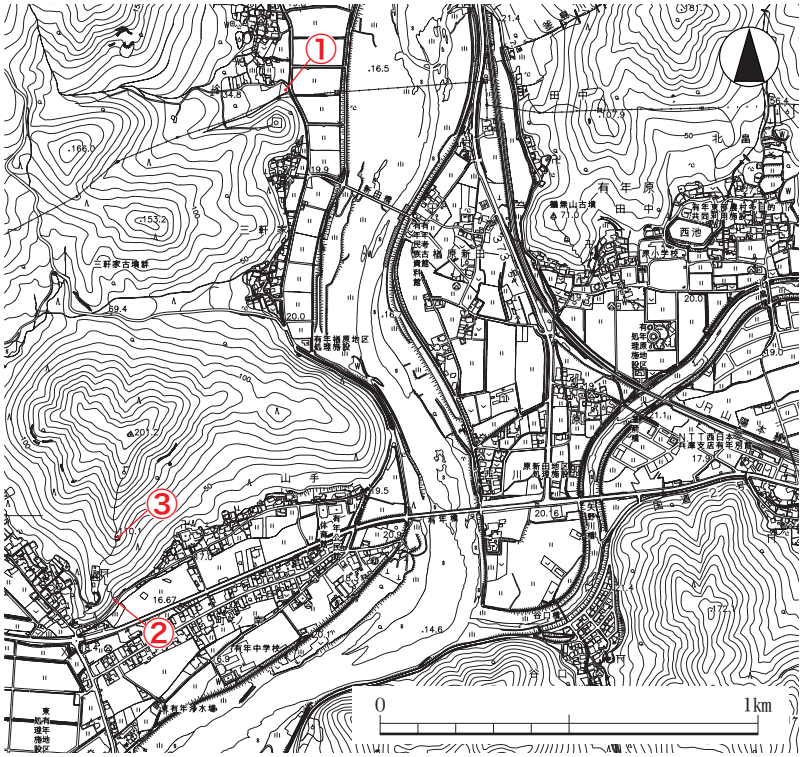
現在は覆屋が架けられその中に大切に祀られているが、一見すると菩薩像が彫られた石は、あたかも土の中から生え出ているように見えるためか「はえぬき地蔵」と呼ばれている。また、虫歯が痛む時この地蔵に煎り大豆を供えて祈れば虫歯が抜けて痛みが治まるということから「歯抜き地蔵」とも呼ばれて親しまれている。

②重ね荒神【東有年】

東有年八幡神社の鳥居がある山裾を少し東に行くと、道路の山側に巨石を二つ重ねた祠があり、これを重ね荒神と呼び、塞（さえ）の神、稲荷社などを祀っているという。塞の神は、道祖神として外部から疫神や悪霊が集落に進入するのを防ぎ追い払う神とされ、村境・峠・辻などに祀られた。あるいは往来する旅人の安全を守る神とも言われる。東有年は街道沿いの村であり、江戸時代には宿が置かれた。重ね荒神もこうした街道沿いであっ

①はえぬき地蔵（地蔵立像板碑）

②重ね荒神



③さいじょうはん（弁慶の足跡）

④盤珪禅師の座禅岩

⑤げんじょの岩

た東有年の歴史を物語っている。

③さいじょうはん（弁慶の足跡）【東有年】

東有年八幡神社の裏山を尾根伝い登った中腹付近に、巨大な岩が起立する所があり、地元ではこれを「さいじょうはん」と呼んでいる。このさいじょうはんの大岩の一つに、弁慶の足跡があるという。

かつて弁慶が姫路の書写山円教寺で修行をしていた頃、ある日この奥の山頂にあった光明寺を訪れた。付近の山中を散歩していた弁慶は、このさいじょうはんの大岩を見つけ、岩の上で力任せに四股（しこ）を踏んだ時、岩の上に大きな足跡が残ったとか。

④盤珪禅師の座禅岩【北野中】

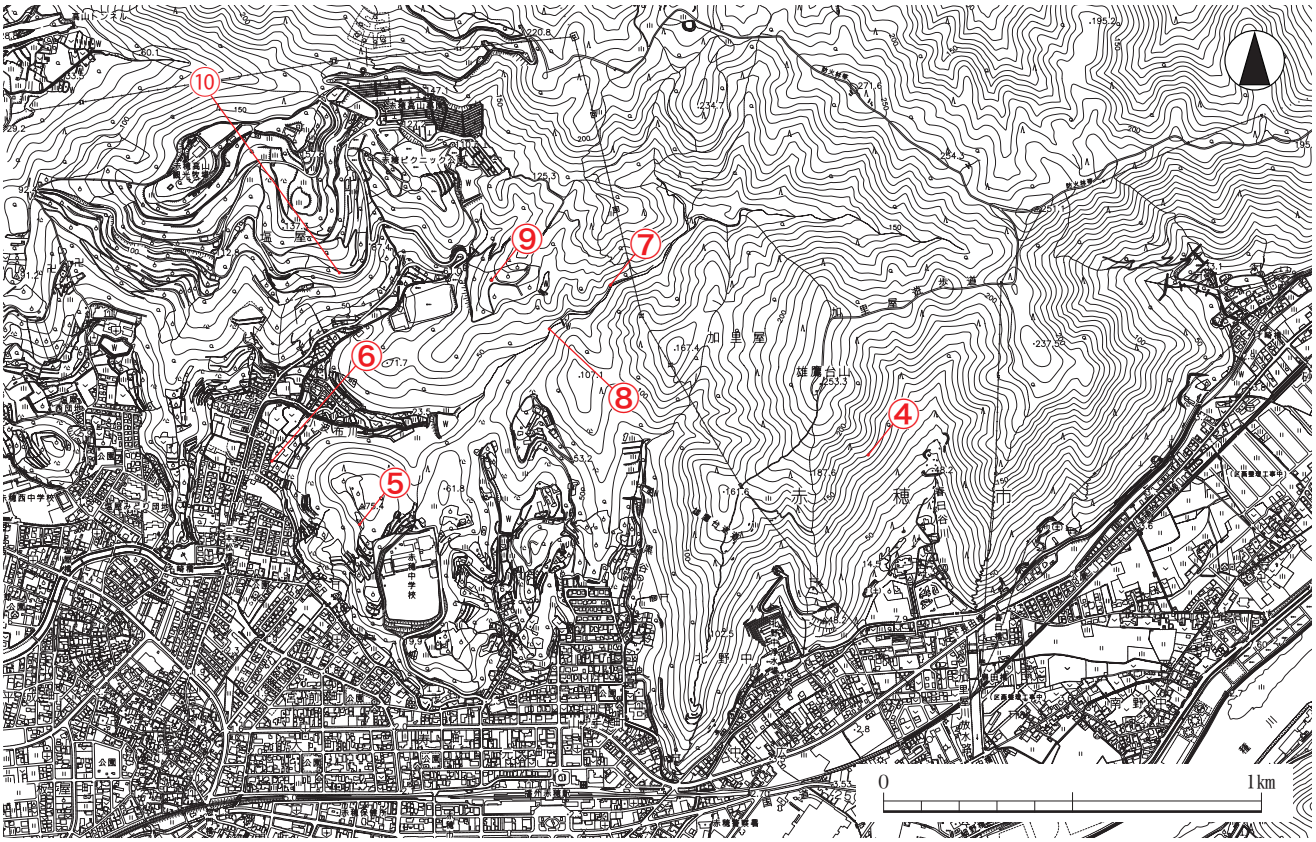
盤珪永琢（ばんけいようたく）は、元和８年（1622）揖西郡網干浜田村（姫路市）に生まれる。幼い頃から仏門に入り、寛永 15 年（1638）赤穂城下の随鷗寺（ずいおう）の雲甫全祥（うんぽぜんしょう）のもとで得度（とくど）した。盤珪は、慶安３年（1650）に北野中に一庵（現在の興福寺）を設け、雲甫の教えである座禅の難行修行を重ね、不生（ふしょう）を説いた。興福寺の裏山の険しい山道を登ると、中腹あたりに盤珪が座禅修行したと伝えられる岩がある。

⑤げんじょの岩【塩屋】

塩屋の荒神社の裏山にあり、高さ約 2.5m を測る花崗岩である。昔から子供達の遊び場として地域の人々に親しまれていた。また、さらに上方には「げんじょの台」と呼ばれる所があり、見晴らしもよいため遊山日には家族で弁当をもって遊んだという。「げんじょ」とはどんな意味なのかはよくわからない。

⑥金時さんの足跡【塩屋】

塩屋の畑ノ元にある。畑の隅の大きな隅石の上面に残る窪みは、



金時さんの足跡だといわれている。

その昔、金時さんというたいそうな力持ちがおり、日本中を旅していた。ある日、四国の高松あたりから「エイッ」と瀬戸内海を跳び越え、片足を着いたところがこの石の上、もう一方の足は高山についたという。その後、金時さんは、しばらく塩屋に住んでいたが、いつしかまた旅路に向かったとか。

⑦主石（おも）【塩屋】

横谷の渓谷を流れる川の中に家のように大きな岩があり、川の主であると伝えられ「主石」として親しまれてきた。

この主石と八畳敷きがある横谷の渓谷は、山道が荒れているため、現在は探訪がかなり困難である。

⑧八畳敷き【塩屋】

かつて、塩屋の横谷から木津・真殿の方に繋がる山道があった。

その昔、この山道には、金玉袋を八畳くらいまで広げて旅人を襲う化け物が出たという。しかし、ある時ついに退治され、その正体は大きな古狸であったという昔話が伝えられており、この昔話の舞台となった横谷にある大岩を「八畳敷き」と呼び習わしている。

⑨お鐘石【塩屋】

塩屋の大林（歯朶山（しだやま））にあるが、現在、私有地のため立ち入ることはできない。高さ 2.4m、幅約 1.8m を測る。寺院の梵鐘の形をしているため、「お鐘石」と呼ばれる。この石とおんびき岩・牛石をあわせて塩屋三岩石とも言われる。この三岩石には「仲のよい三つの岩」という昔話が伝えられている。

この三つの岩は、毎年正月の三日になると、一緒に遊ぶことになっており、それぞれの石が大きな声で鳴いていたが、塩屋の人が草履を投げつけたところ、それ以来鳴くことがなくなったという。

また、このお鐘石と谷を隔てた西方の山の上にあるおんびき岩を結ぶ線は、春分・秋分の日に太陽が昇る方角、すなわち真東を示すといわれている。

⑩おんびき岩・牛岩【塩屋】

「おんびき」とは大蛙のことをいう。尾形山の中腹、道路の上側には大蛙の形をした「おんびき岩」、下側には大牛が寝た形をした「牛岩」がある。おんびき岩の下方には「子供おんびき」があったが、現在は見られない。お鐘石とともに、塩屋三岩石に数えられる。

牛岩は昔、燃料用の薪などを集めた時、「ねばせんか。（束にする）」と言って、牛岩の背の上に皆集まり、整えた場所として親しまれてきた。

⑪天神岩【坂越】

坂越の西之町の集会所付近、かつての波打ち際から９m程先の海中に畳２枚分ぐらいの岩あった。

菅原道真が九州の太宰府に左遷された時、難波（大阪）から小舟で西に向う途中、潮待ちのため坂越に寄港した。その時、この岩に上がって坂越の景色を賞したという。坂越三霊石のひとつに数えら

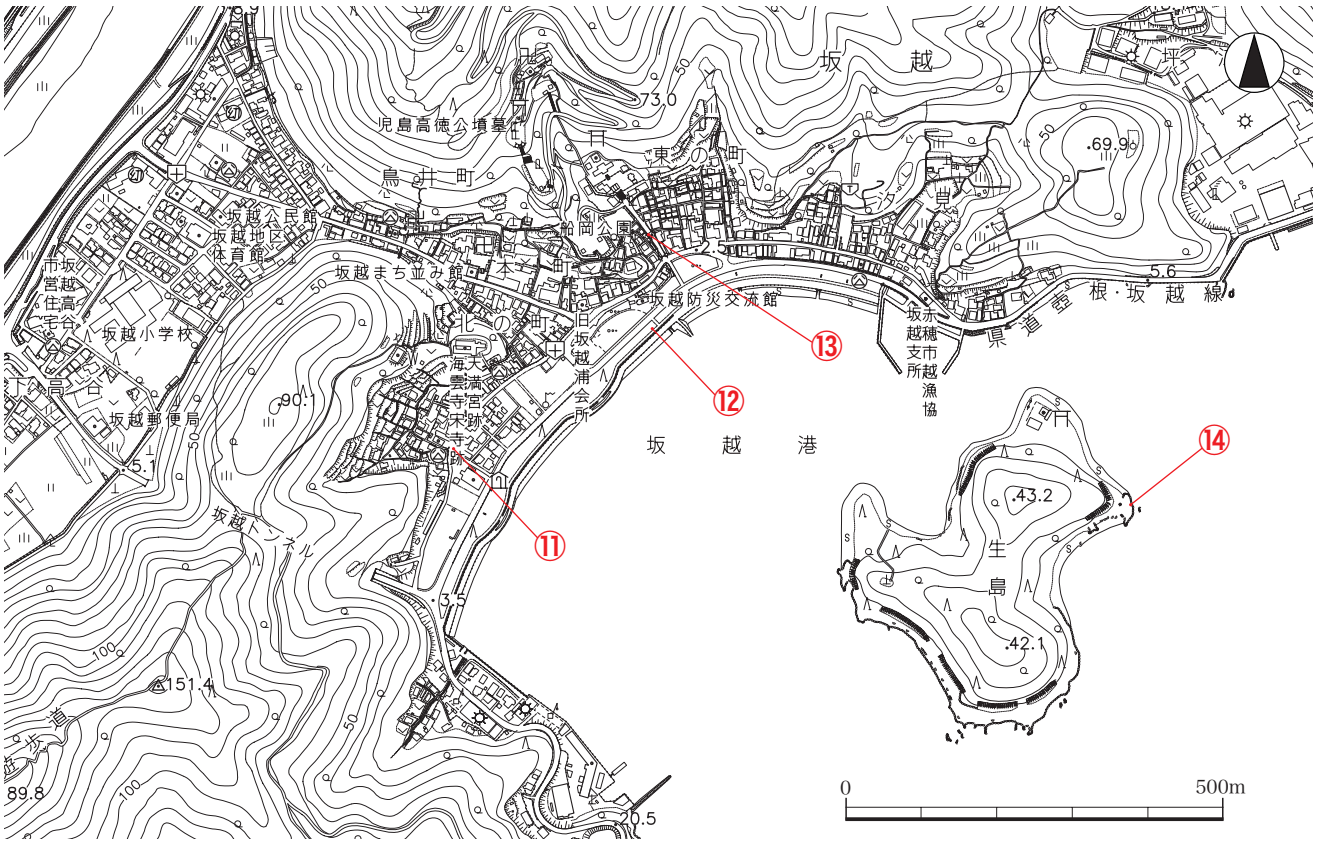
⑥金時さんの足跡

⑦主石

⑧八畳敷き

⑨お鐘石

⑩おんびき岩・牛岩



⑪天神岩のあった付近

⑫御前岩を顕彰する小倉御前之碑

⑬神石

れ、この石を動かすと異変が起こるとか、子供が小便をかけると熱が出たとも言われた。

現在は、海岸の埋立によって地面の下になっており、見ることができないが、集会所前に説明板が掲げられている。

⑫小倉御前岩【坂越】

かつて南朝の皇族小倉宮（おぐらのみや）（後亀山天皇の皇子）が、南北朝の争いに敗れ坂越に隠棲していたが、嘉吉の乱後、山名持豊が坂越に進出するに及び、ことこれまでと坂越の海に入水自殺したという。その場所の海底に「御前岩」と呼ばれる岩があり、『播州赤穂郡志』（藤江忠廉・1727 年）には、「海中礒辺ヲ隔ルコト十間ハカリ、岩二ツ有テ相並フ、一ツノ岩ノマハリニ石垣アリ、海ノ地形ヨリ高キコト一尺五寸許塚アリ、小倉御前トイフ、此アタリノ海水深サ三尋ハカリ、人工ヲ用ユヘカラス、不思議ノ所ナリ。」と記している。

現在はふるさと海岸整備により埋め立てられ陸地となっているが、海から見て御前岩があった方向に「小倉御前之碑」と説明板が立てられている。なお、毎年 10 月の第 2 日曜日に行われる大避神社祭礼の船渡御（ふなとぎょ）では、渡御の船団が東之浜から出航してすぐの亀の甲付近を通過したとき、各船から酒・塩・洗い米を海中に投げ入れ、御前岩の方向に向かって遙拝が行われている。

⑬神石【坂越】

大避神社参道の鳥居付近の路傍にあり、坂越三霊石のひとつに数えられる。この石を動かしてはならず、小便など不潔なことをすると祟るといわれている。なお、坂越三霊石とはこの神石と西之町の天神岩、鳥井の民家に残る石をいう。

⑭飛び付き岩【坂越】

秦河勝（はたのかわかつ）は、聖徳太子の死後、蘇我入鹿の乱を避けて難波から船出して西に向かい、皇極天皇３年（644）９月12日に坂越湾に浮かぶ生島の東岸に漂着した。この時、船から最初に上陸したのが生島の「飛び付き岩（鼻）」という。生島には、河勝の墓と伝えられる墳墓があり、大避神社の御旅所が設けられている。これらの由緒によって生島は聖地となり、古来より人々の立入りが禁じられてきた。

なお、国の重要無形民俗文化財「坂越の船祭」は、秦河勝の生島への漂着伝承に基づいて、９月１２日をもって祭日としていたが、現在は10月第２日曜日に本宮が執り行われている。

⑭飛び付き岩

⑮おせどの牛石・馬石【尾崎】

「おせど」は、大石内蔵助良雄の家僕であった妹尾孫左衛門の兄である元屋八十右衛門の屋敷があった所であり、元禄14年（1701）の刃傷事件の後、内蔵助が城明け渡しの残務整理のため６月25日まで仮住まいした所と伝えられる。現在は、「伝大石良雄仮寓地跡（でんおおいしよしたかかぐうちあと）」として赤穂市指定の史跡となっている。

⑮おせどの牛石・馬石

敷地内には瓢箪形の池があり、池のほとりに「牛石・馬石」と呼ばれる二つの石が残されている。池に向かって右側は牛がうつ伏したような形の牛石、左側は馬が立ったような姿をした馬石である。この二つの石は、もと赤穂城の本丸内の庭園にあったものであるという。明治維新後に赤穂城内から転々としたが、昭和になってここに移された。石は薩摩石といわれ、薩摩藩の島津家から浅野家に贈られたものであると伝えている。

⑯ノット岩【尾崎】

尾崎の宝崎神社の境内にある長さ約 15m、高さ約 1.7m ほどの低く平らな溶結凝灰岩質の流紋岩で、赤穂八幡宮の秋祭りでは御旅所となり、神輿がこの岩の上に着座する。この岩については、次のような伝承が伝えられている。

神功皇后が三韓征伐の帰りに海が台風で大荒れになり、難破寸前の時、近くにあったこの岩に船を繋ぎ、波の静まるのを願って祝詞を唱えたところ、たちまち波は静まり、船を進めることができたという。そのためこの岩を「のりとの岩（ノット）」というようになった。

⑯ノット岩

⑰弁慶のとめ岩【尾崎】

県道坂越・御崎・加里屋線の丸山付近、道路から山側の雑木林に入った所に長さ 5m、高さ 2.5m 程の巨石が横たわっている。

その昔、村人たちが丸山で薪を束ねていたところ、山頂からこの大石が転がり落ち、一人の村人が下敷きになろうとしたその瞬間、ちょうど通りがかった弁慶がこの岩を支え止め、村人を救ったという。弁慶は、四国に修行に向かう途中であったといい、今も岩に残る窪みがその時の弁慶の両手と右膝の跡だと語り継がれている。

また、県道沿いに西へ向かい、御崎に接した尾崎の向山南西斜面中腹に、横穴式石室をもつ赤穂市指定文化財「尾崎・大塚古墳」がある。古墳時代後期の古墳であるが、その石室は古くから開口していたためか、弁慶が住んだ「弁慶穴」とか「窀」と呼んでいた。

全国には、弁慶ゆかりの石がさまざまな伝承とともに残されている。市内にもこの「弁慶のとめ岩」と東有年の「さいじょうはん（弁慶の足跡）」の伝承が伝わっている。

⑰弁慶のとめ岩

⑱畳岩と御前岩（鷗護岩）【御崎】

その昔、三崎の地に住んでいた大国主命の姫であるイワツヒメは、毎夜訪ねてくる夫を待つ日々を送っていた。ところがいつの頃からか夫が訪れなくなり、姫は畳岩の上で毎日待ちわびていたが、遂にその岩の上で亡くなってしまった。村人は悲しんでそこに祠を建ててお祀りしたのが伊和都比売神社で、江戸時代になって浅野長矩が現在地に移した。

祠があった岩礁は神社の東側の海岸にあり、「畳岩」（『播州赤穂郡志』では「大園」とも記している）と呼ばれ干潮の時にだけ陸続きとなる。また、神社の鳥居前方の海上に「御前岩（鷗護岩）」という沈礁があり、現在は灯台が立てられてれいる。

⑱畳岩と御前岩（右奥の灯台）

⑲大師さんの井戸と腰掛け岩【御崎】

御崎の山手地区に「大師さんの井戸」と呼ばれる共同井戸があり、この井戸の脇にある扁平な石を「大師さんの腰掛け岩」と呼ぶ。弘法大師が全国行脚の途中に御崎の地を訪れ、この井戸の傍らの岩に腰掛けたという。それ以来、この井戸がある所を腰掛山と呼ぶようになった。

⑲大師さんの井戸と腰掛け岩